

Title	哲学の授業
Author(s)	青木, 健太
Citation	臨床哲学のメチエ. 2011, 17, p. 34-36
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/10046
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

## 哲学の授業

## 青木 健太

「洛星高校プロジェクト」は「高校で哲学の授業をする」という活動をしてきた。2011年度のもう半分は終わっている。問いは増えるばかり。もっとも、それは哲学らしい「前進」なのかもしれない。授業とは何だろうか、何をすれば授業か、まして哲学の授業をしかも高校でするとは。

言葉の成り立ちに注目する。「授業」は「業」と「授ける」からできている。業を授けるのが授業だ。業ということがどのくらいの広がりを持っているかは定かでないが、何も教えられることがないなら、それは授業ではない。そして、「授ける」は「授けるひと」がいることを含んでいて、「授けるひと」がいるなら「受けるひと」もいる。「授業」は「受業」でもある。授けるひと、受けるひと、業がそろってはじめて授業になる。

高校の授業なら、英語とか数学とかついての知識を業というのだろう。哲学はどうだろう、哲学は業に入るだろうか、哲学についての知識を授ければそれは哲学の授業だろうか。

哲学についての知識というのもあるにはある。デカルトがいつどんな本を書いて誰に反論して、何を言った。その知識が何の役に立つかわからないとしても、それは古典や数学もさして変わらないのだから問題ではない。テストもできる、空欄補充であれ記述問題であれ。ということは、点数が出せて成績評価もできる。

それは「倫理」という科目と同じだろう。わざわざ「哲学」と名乗るのであれば、それは何か別なことをしようとしているのではないだろうか。

業という言葉に戻る。業は「おこない」とか「仕事」という意味をもっている。業は「何かをする」ということに関わっている。ということは、知識を授けるということはむしろ広い意味での授業に含まれることになる。「おこない」を授けるのが狭い意味での、あえて言えば本来の授業ということだ。それならば哲学は業に入る、というよりむしろ哲学こそ業に入る。哲学は「知を愛すること (philo-sophy)」なのだから。

知を愛するといっても、何をすれば そうなるだろうか。たとえば、知識を たくさん手に入れようとすれば知を愛 していることになるだろうか。

知識を手に入れようすることだけで 知を愛することになるなら、受験生は 半端ではなく知を愛していることにな る。だから、彼らは哲学者と呼ばれる。 こんなことはありえない。彼らは全会 一致で哲学者ではない。知を愛するた めの方法は、それを手に入れようとす ることではない。もしソクラテスが「君 たちは何も知らない」と言いふらすだ けだったとしたら、彼はただの変な人 か懐疑的なソフィストだ。彼はそうは しなかった。彼は人々に問いかけた、 「君は勇気とは何か知っているか」と。 そして、問われたひとはとうとう答え られなくなって自らの無知を知る。自 分のことを知る、それも自分の力で。 ソクラテスはこれを大事にした。そし て、彼は問いかけることによって人々 の気づきを手伝った。ソクラテスが哲 学者と呼ばれるなら、知を愛すること とは「問い、語り合うこと」だ。

問うことをすれば何でも知を愛する ことになるだろうか。疑問文をつくる ことが問いをたてることなのだろう か。

疑問のかたちをしていれば何でも哲

日の夕食は何だったか」と誰かが尋ね たとしても、それは単なる事実確認で しかない。問いが哲学的であるのは、 誰しもが当たり前だと思っていること にあえて疑問をもつそのとき。この問 いがふつうの疑問と違うのは、あえて 問おうとしなければ問いにならないと ころにある。誰もが当たり前に理解 してしまっていることなのだから。ほ んとうはそっとしておけば上手くいく に決まっている。それにしても実際の ところその当たり前が何なのかはよく わからない。だから問う。しかも自分 ではわからないから誰か他のひとに間 う。誰もが当たり前だと思っているの だから、そのひとも問われたところで わからない。そうやって、語り合いな がらどんどんひとを巻き込む。哲学的 な問いはひとを渡って誰しもが共有す ることができるようなものだ。

さて、そろそろ話をまとめてみよう。 「高校で」ということが全然触れられ なかったが、何か言えることがあるだ ろうか。

授けるべき業は知を愛すること。そ して、それは当たり前のことを問いに 変え、誰かとともに語り合うことで共 有すること。授けるひとはその作法を 学的な問いというわけではない。「昨 いくらかは知っている。だから、彼が

ソクラテスになればいい。受ける人が 自分で問いを見つけることができるよ うになるまで、手を貸す役割をすれば いい。高校でこの授業をすることに意 味があるかどうかは、それほど曖昧で はない。学問は「問い」ながら「学ぶ」 ことなのだから。あとは業の授け方次 第だ。

これから何をしようか、どんなこと ができるだろうか。「彼がソクラテス になればいい」といってもそれは私た ちのことなのだから。問いは尽きない。 私たちがしていることは哲学だ、とい うことの証だろうか。

(あおき けんた)

